町民文芸

只見短歌会　令和七年三月詠草

幼孫隠したつもり丸見ゑの花持つ手背に満面に笑む　目黒　富子

雪まつり降雪多き最終日祈願花火の冴へて広がり　関谷登美子

春風を見方に付けてどこまでもぐんぐん進む三輪車の息子（こ）　立花　奏音

初夏の日のやふな気温となれどけふ真冬に戻り雪の舞ひ散る　新国由紀子

豪雪も晴れの日続けば雪嵩は日増しに減りて春間近となり　渡部ヨリ子

只見俳句会　三月定例会

絵筆とる出来るはずと老桜　味代子

行きあえず別れた友の吾亦紅　一穂

疲れたねと挨拶交わす雪の明け　一恵

雪壁にライトアップを君みてますか　修一

食洗機に二ヶずつの食器水温む　真理子

いつの間に鷹化（たかか）して鳩となる裏の雪　信

空き家からピアノの響き冬の朝　睦子

日向ぼこ猫の眠りに光さす　礼

雪嶺の型の違う塔三基　都

鈴の音の腕を伝うる初詣

春兆すお洒落（しゃれ）も楽しデイサービス

刃物研ぐ梅の剪定の準備よし

雪間草（ゆきまぐさ）いよいよ色を増しにけり

雪代（ゆきしろ）のぶつかり合って音高し

トランプに振り回されて春うらら

雪掘やラーメンの誘惑ガキの頃

春炬燵（はるごたつ）めくれば老の足有りき

亡き人の遺影に語る春彼岸